HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	初期ルカーチにおける内在と超越の問題 ： ハイデルベルク美学論稿研究序説［論文内容及び審査の要旨］
Author(s)	秋元, 由裕
Degree Grantor	北海道大学
Degree Name	博士(文学)
Dissertation Number	甲第12504号
Issue Date	2017-03-23
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/65735
Rights(URL)	https://creativecommons.org/licenses/by-nc-sa/2.1/jp/
Type	doctoral thesis
File Information	Yusuke_Akimoto_abstract.pdf, 論文内容の要旨

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

学位論文内容の要旨

博士の専攻分野の名称：博士（文学）　　氏名：　秋　元　由　裕

学位論文題名

初期ルカーチにおける内在と超越の問題

――ハイデルベルク美学論稿研究序説――

本論文はルカーチ・ジェルジュ Lukács György(1885-1971)の『ハイデルベルク美学論稿』(1916-18)を中心的題材として、その思想史的意義を『歴史と階級意識』との関連において明らかにしようとする試みである。本論文では〈内在と超越〉という対概念が準拠枠として設定され、それによってルカーチの物象化批判の〈コンテクスト内在性と超越性〉について吟味されている。

本論文ではルカーチの『芸術の哲学』(1912-14)から『美学論稿』への改稿プロセスの検討を通じて、『美学論稿』において『歴史と階級意識』の革命的実践の思想と、その物象化批判の議論が準備されたことが示される。さらに本論文では〈未在のものへの目的論〉という概念を手がかりとして、ルカーチの物象化批判はヘーゲル的目的論とは異なるものとして理解されるべきだと主張されている。『美学論稿』の改訂は、芸術作品のうちに体験的現実からの救済領域を求める『芸術の哲学』でのユートピア主義から、主体性の解放過程としての「美学の現象学」に至ることを意味するが、それは『歴史と階級意識』における「同一的なる主体－客体」概念につながる。『芸術の哲学』では「同一的なる主体－客体」は、主体と客体の同一性が「成就」することによって美的領域で完結してしまう。しかしそれに対して〈未在のもの〉への目的論を志向する現象学的行程は、常に非完結的である。本論文で秋元氏はこのような「美的経験」を「実践的変革」として解釈し、『美学論稿』のうちに「ルカーチ自身における実存的転回」を見て取ろうとする。

体験的現実からの救済領域として、美的なものを「ユートピア」として希求しているだけならば、既成の現実を放置するだけであり、疎外や物象化といった現実にある不協和を解決することはできない。本論文では『美学論稿』には、美的創造と受容の問題として語られていた現実変革という課題を、改めて革命的実践の問題として捉え直すという意図がルカーチにあったことが示される。そして本論文は美的なものにおいて発見された「同一性」を現実変革の理念としつつも、その都度の現実変革は「同一性」を達成するものではないという認識が、『歴史と階級意識』の核心部分につながっていくことを明らかにしている。ルカーチの「美学の現象学」では物象化された既成の現実連関を打破しようとする志向が働いている。しかし社会的・歴史的現実の領域に美学の主体概念を直接転用することはできないので、美的価値を到達目標とする現象学の構成は、「未在のものへの目的論」を志向する「現象学」へと再編される。そしてそれが脱美学化された地点に『歴史と階級意識』が位置していると考えられるという解釈を秋元氏は示している。

以下は、各章の内容である。

第一章「ハイデルベルク美学論稿の基本的構成」では『美学論稿』の資料状況、成立史、影響史と先行研究の現状について概観される。さらにそれを通じて、これまでの研究が『美学論稿』を単純に美学理論の次元でのみ解釈し、ルカーチの物象化批判の思想と関連づけてこなかったことが問題点として示される。秋元氏はこれに対して、『芸術の哲学』までのユートピア主義が『美学論稿』を通じて革命的実践の思想へとどのように変容したのか、という問いを提起する。

第二章「ユートピア的現実としての芸術作品」では、『芸術の哲学』におけるユートピア思想の実質が、最初期の『近代劇発達史』以来の一貫した主題である「誤解」論を軸に、キルケゴール論を通じて明らかにされる。ルカーチは『芸術の哲学』において芸術作品を、その創造者と受容者双方による「誤解」の交点として定式化し、それによって作品に「ユートピア的現実」という意味を付与している。本章ではこの「誤解」という主題は『芸術の哲学』までのテクストを一連の思想的展

開として再構成する上で、有用な参照点となることが示される。

第三章「解放としての美的体験」では、『芸術の哲学』のユートピア思想が第一次世界大戦を通じて変容し、『美学論稿』を通じて革命的実践の思想へと転換する過程が、テクストに即して示される。本章では、芸術の内に「ユートピア的現実」を見出して救済を待望する限り「体験的現実」全体は変わることはない、という認識がルカーチを『美学論稿』の再構成へと衝き動かしたという問題意識から、『美学論稿』のテクストが読み解かれている。そこで新たに構想された「美学の現象学」が、ルカーチが準備しつつあった現実変革の思想を表現していることが本章では示される。

第四章「『精神現象学』とルカーチの現象学構想」では、「美学の現象学」をヘーゲルの『精神現象学』と対比させつつ、ルカーチの現象学構想がどのような内実を有するのかが明らかにされる。ヘーゲルの『精神現象学』は「意識の経験の学」としての理念を超えて「絶対知」の目的論となっており、当事的意識に対して他律的な強制連関が生じていることが確認される。これに対してルカーチの「美学の現象学」は、美的価値を志向する目的論でありながら、このような強制連関を廃棄して当事的主体の自律性を実現しようとする逆説的な試みであることが示される。さらにルカーチにおいては、〈美的価値の体験的性格〉が、その現象学の内在的超越性を確保する手がかりとなっていることが述べられている。

第五章「美学の臨界」では、『歴史と階級意識』の準備期にあたるハンガリー革命期から「三月行動」以後の政治論文を題材として、コンテクスト超越性とは「美学の現象学」の思想が現実変革の領域へと転移された結果であることが明らかにされる。「美学の現象学」における自然的態度からの「背馳」という思想は現実変革の領域では、現実をそのコンテクストに外在的な立場から見る超越的態度を導くことになる。本章では、それがルカーチ独自の初期マルクス解釈と結びつけられ、「階級意識の意識化」という主観主義的な思想を生み出したことが示される。

第六章「未だないものの意識」では、『歴史と階級意識』の中心論文「物象化とプロレタリアートの意識」を主な題材とし、「同一的なる主体－客体」としてのプロレタリアートという「表明」それ自体が、前章で見た「階級意識の意識化」論からの転換の結果であることが示される。本章では『歴史と階級意識』が以前のコンテクスト超越性を一旦廃棄し、新たに内在性を追求する試みとして把握される。またルカーチの物象化批判が先行諸解釈によって「観念論」だとみなされてきた背景には、「同一的なる主体－客体」概念を、主体と客体との「同一性」と混同する理解がある。本章では両者を厳密に区別することによって、この概念に示されている思想が〈未在のものへの目的論〉として解釈される。この解釈によって、「美学の現象学」における自律的体験の現象学が、物象化批判と現実変革の問題領域においても、プロレタリアートの主体性を擁護する理論として継承されていることが示される。

そして補論「初期マルクスの本質概念」では、〈未在のものへの目的論〉という思想がマルクスにも見られることが示されている。『パリ手稿』でのマルクスの疎外批判論の根底にある本質概念は反本質主義的実質を有するものであることが示され、反本質主義という点でルカーチとマルクスが共通する思想をもっていたことが示唆される。